
東方操粒子

もりぶでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方操粒子

【Nコード】

N38600

【作者名】

もりぶでん

【あらすじ】

日常生活から一転、死神の気まぐれで東方の世界に飛ばされてしまった。これからいったいどうなるの・・・

この作品は作者のストレス発散？小説です。主人公最強ものの予定です。

独自設定も多々あるかと思うのでご了承ください。

ブログ1（前書き）

初めての投稿です。至らないところが多々あるとは思いますが、どうぞよろしくおねがいします。

プロローグ 1

「楽しそうだったから」

目の前にいる自称死神さんはそうおっしゃいました。

今の状況を説明するところなる。

朝起きて、目が冷めて、大学に向かって、駅のホームで待ってたら後ろから誰かに押されて・・・

気づいたらよくわからない場所にいてよくわからないおっさんが立っていた。

「あのー、ここはどこであなたは誰なんでしょうか？」

「ここは死の狭間で私は死神でーす」

なんとなく自分が死んだ気がしたが・・・やっぱりかー・・・

「急にここにきて死を受け入れられているなんて、あんた変わってるなあ」

「いや、なんとなく・・・って、人の心読まないでください。あと、その明るい口調は一体!？」

ついついつつこんでしまった・・・

「まあまあいいじゃん」

「はぁ・・・でどうして俺はここに？」

「楽しそうだったから、殺しちゃった」

・・・は？いまなんと？殺した？しかも

「楽しそうだったから」

あまりのもあっさり言われたので、怒る気も何も起きなかった

プロローグ1（後書き）

初めてなのでとても短いです

プロローグ2

「で、なんで”楽しそう”なのか、そのところ説明をお願いしたいんですけどね！」

もうやけくそである。

「実は……」

急に深刻そうな顔つきになった死神を見て、俺も黙る

「君って神社の家系だよな。ちよっぴり面白い特殊なものを君から感じるのさ。」

そんなもの自分にはまったく実感がない。今まで20年も生きてきて、これといって変わったこともなかった。

「それはー、あの世界じゃ力は発動しないわな。・・と、いうわけで、この私、死神があなたに”転生”という形であなたにあった世界へと送ろうと思いついたわけさ。いやー、さすが私。」

転生という言葉にちよつと反応してしまった。中学校のとき、よく想像してたなあ、なんて。

「いやー、楽しそうでしょ。私も楽しみですよ、あなたがどんな人生を歩むのか。」

・・・もし目の前の自称死神さんが言っていることが本当なら。自分に隠れた力があるのなら。確かに楽しそうな気がしてきた。(流されてる気がしなくもないが

「ただねー・・・、いくら特殊な力があるとはいえ、生身の人間じゃちよつときつそうなのよ。だから私からちよつぴりとプレゼントを与えます!」

「プレゼント?それはいったい「まあまあ、もう御託はいいでしょ、さてさっさといってらっしゃーい」それを教えてからにしろー!!」

その言葉を最後に自分の意識は遠のいていった。

プロローグ2（後書き）

なんか、文章がめちゃくちゃな感じが……。改めて小説書いてらっしゃる皆さんがすごいと感じます。

第1話（前書き）

ようやく、それらしく話が始められました。結構書いたつもりでも、読んでみると一瞬・・・。

第1話

目が覚めると知らない天井だった・・・いやほんとうに。

周りを見渡してみると、どうやらちいさな小屋のようなところだった

さらによく見ると、紙のようなものが落ちていたので拾ってみてみると

「おはようございます、これを読んでいるということは無事目が覚めたようですね、よかったです。そちらの世界へ行ったということは、瞑想するような感じで自分の力が見えてくると思うよ、たぶん。プレゼントもしっかり与えました。では、よりよい人生を〜」

プレゼントについて結局よくわからなかったが。しかし・・・

目を瞑って集中してみる。

なにかがぼんやりと見えるような気がしたと同時に、頭の中にずっと情報が入ってくるような不思議な感覚にとらわれた。

” 粒子を司る程度の能力 ”

これが、その不思議な力なのだろうか。さいわい自分は理系の人間であるので、粒子については一般人よりは詳しい、はず。

「粒子って、原子とかまさか未発見のグラビトン粒子とかも見えちゃったり・・・」

まさかでした。ずっと能力を使うイメージで虚空を見つめたら見えてしまった・・・。あと、これも力の影響なのか、無限のようにある粒子が、それぞれ区別して見れるのだ。

そこでふと思いつく

「司るってことは、操れたりもするのかな？」

自分の周りのグラビトンを消去してみると体がふんわりとういた

「・・・」

今度は、自分の前にある大気の粒子を減少させ、低気圧のようなものを作るようにしてみると引き寄せられるかのように前へと動いた。

空を飛べることが実証されました テレッテー

これは、使い方だと思いますすごいことが出来そうだ

と、それよりも、ここがどこなのか急に気になり始めた

小屋の外に出てみると、あたり一面木が生い茂っていた。

「森の中かな？・・・食事とかどうすればいいんだ・・・」

そんな独り言をつぶやいたときだった、目の前に急に黒い影が現れたかとおもうと、その影が急に自分のほうへと飛び出してきた

「っ!!」

とっさに、大気の粒子を圧縮するイメージで壁を作りその影をはじき返した。・・・いや、われながらよく反応できたわ。

「いてて・・・あんさんいきなり殴るなんてひどいわぁ・・・」

いや、殴ってはいないんだが・・・って言葉？人だったか・・・!?

と、確かに人のなりはしていたが、頭から生える2本の角・・・これは妖怪？鬼？というやつなのかな？死神も違う世界とかいったし・・・たぶん

「急に大きな妖気感じたから確認しにきただけなのにお・・・」

妖気？え・・・

そこで自分の姿を確認してみる

いつの間にか来ていた洋服は着物になっていて、背も心なしか小さくなってるような・・・

確認の意味もこめて聞いてみた

「え、あの妖気って、その・・・まさか俺から？」

「あんさんなにいつてんの、だからここにぼくがきたわけでしょ」

プ、プレゼントってそういうことかあああああああ！

第1話（後書き）

結構独自設定はってます。グラビトンとかそもそもあるかどうかすらわかってないですしね。

まあ、ファンタジーということでご了承くださいまし。

第2話（前書き）

ちよつと更新

第2話

「なんだ、呆然として・・・もしかして、あんさん生まれたての妖怪か？」

「「まあ・・・たぶん、そうです、ええ」」

まあ、ほとんど事実だし。それにこの場合は、生まれたてってことにしたほうが、うまく収まりそうだし

「それにしては妖力がやけにでかいような・・・」

「「そうなんですか・・・よくわかりませんが・・・」」

意外な事実発覚！

「「と、とにかく、ここはどこであなただは誰なんでしょう？」」

「ん？ここは妖怪の山で、僕はこの山の主の”蒼健”って名前だ。」

妖怪の山ってまんまだ・・・って、主！？

「主様でいらっしやいまシタカ」

「なんかすごいカタコトだな・・・。まあ、生まれたてということみたいだし、聞きたいことも多いだろ。とりあえず僕の家招待するわ。」

「は、はい。お願いします。」

蒼健の家に着いた。

「あの、ここってどんな生き物がいるんでしょうか？」

到着早々、一番聞きたかった質問を試してみた

「んー、獣とか人間とか妖怪とかかのお」

大方自分の予想通りだった。

「で、他には」

「「えっと・・・ご飯はどうしてるんでしょう？」」

人間が飯とか言いませんように・・・

「獣狩ったりしてたべとるよ。たまに迷い込んだ人間とかな。」

うわぁ・・・

「「に、人間って食べなくても害はないんですかね・・・」」

「ん、あんさん、妖怪なら人間食べるのが普通だよ。まあ、中には食べない変わり者もいるがな。」

よかった・・・食べなくても生きていけるんだ

「まあ、見た感じ、あんさんくらいの妖力があれば、獣狩るくらい簡単だろうな。」

正直獣もあまり食べる気はしないが・・・仕方ないのかな・・・

「あー、あと、この山のふもと付近にある人間の村にはいかないほうがいいぞ・・・。妖怪と見るや否やおそってくるから」

「「わかりました」」

まあ、そうだろうな・・・人間食べてるんだし

・・・さて、そろそろ帰りますかね。まだ、いろいろと自分のことで確認したいことがあるし

「「それじゃ、いろいろとありがとうございました。」」

「もういいんか？」

「「ええ、これでもちよつと頭の中が・・・いろいろと自分の中で整理してみたいので。」」

「そうか、それじゃまたいつでもこいな。そのときは・・・」

？なんだろう、なんとなくいやな予感がしたが・・・

「「はい、お世話になりました。」」

帰り際にチラリと見た時の彼の顔は、とてもいい遊び相手を見つけたかのようなそんな不敵な笑みを浮かべていた。

「あ、あの子の名前を聞くの忘れてたな・・・」

第2話（後書き）

んー、話書くの難しい・・・大変。

次回は自分の能力分析的なことをやると思います

第3話（前書き）

The 説明回

第3話

自分の小屋に帰ってから、思いつく限りのことを試してみた。

まずは、粒子の変換

酸素を炭素に変えてみたり、ただの炭をダイヤモンドに変えてみたり、かなり応用が利くようだ

光子にも変換することが出来たので、少し怖いが、自分を光子にすれば光の速度で動けるはず！（黄猿さんみたいな）

そして、歓喜！！

なんと、周りの粒子を利用して食べ物を作ることが出来た。いきなり食糧問題が解決！

さらに、粒子同士をばらばらにしたり、それをまたくっつけたりも

出来た。

これは恐ろしいもので、どんな硬いものでもあっさり、思うがままに切断分解できてしまう・・・。

まあ、また元に戻ることも出来るけどね。つまり怪我とかもうまくやれば治せる。

我ながらにチートな能力だ・・・（汗

しかも、いきなりここまで使いこなせるとは思わなんだ。

あと、自分の姿が気になったので、空気の圧力を変化させ鏡化させ確認

髪の毛が白になって、背はやっぱり縮んでる・・・

が、しかし！ 自分で言うのもあれだが、顔がイケメンになってるのだ！ 死神ありがとう

はぁ・・・今日はいろいろあって疲れたよ・・・死んだかと思えば、変なところにいきなり飛ばされて、人じゃないやつに遭遇するとかないわ。

さっさと寝てまた明日だ。それじゃおやすみ！

第3話（後書き）

次回は、森の外にちょっと探検・・・の予定

第4話（前書き）

ご指摘がありまして、2重かぎかつこは今後は使わないで行こうと思います。

「主人公のセリフ」という感じがしたが、「主人公のセリフ」と、普通に戻します。

第4話

目が覚めたら目の前にあいつがいた

「新しい生活はどうだい？」

死神さんでした。

「こうやって姿見せられるんなら、何で昨日すぐに来なかったんだ」

「いやー、プレゼントでどれくらい驚いてくれるか見たかったんだよね。案外すぐプレゼントがわかったちゃったけど。あなたの反応、おもしろかったわー」

この死神め・・・

「妖怪？になったのは、まあいい。能力からして妖怪みたいなものだったしな。それより気になったのが、昨日あった蒼健について。」

「昨日、あなたが会った蒼健は、鬼という妖怪。・・・実はこの世界、東方作品の世界なんだよね。君、ちよつとは知ってるんじゃないのかな。」

・・・知ってる、ちよつとだけ。友達がやたら勧めてきたゲームだったはずだ。たくさんキャラクターがいたと思うが、ほとんど覚えてない。

「てことは、ここはゲームの世界なのか・・・」

「うーんと、一応実在する世界だよ。ようは異世界っていえばいいかな？」

その辺についてはよくわからんが、とりあえず俺は東方の世界にいる！・・・らしい

！思い出した、そういえば・・・

「そういえば昨日、蒼健がいていたんだが・・・俺の妖気が強いとかどうかって。」

「そりゃそうだよ、彼の50倍の妖気を詰め込んだからね」

はあ・・・さいですか・・・。

「ちなみに彼は、この時代最強の妖怪さ！つまり君は彼より強い・・・新しい最強の妖怪ってわけだ」

とても得意げな顔をしている死神さん。

「まさか、あなたの能力がそこまですごいのだったとは私にもわ

からなかったからさ、念のために妖気強めにしておいたらやりすぎだったね、てへっ☆」

「てへっじゃないですよ！・・・まあ、強いぶんにはいいんで、別に文句はないですが。」

「うむ、くるしゅうない」

そういっておちゃらけたあと、死神は急にまじめな顔になった

「・・・何か問題でも？」

「うーんとね、・・・実は、私がハメはずしすぎちゃって、上の人に勝手やったのばれちゃったのさー、あはは・・・。だから、もう君には干渉できないかもしれない。本当はずっと君の生活見て楽しみたかったんだけどなー。」

「神々の総意じゃなくて、独断だったんですか！」

勝手すぎる・・・

「そういうわけで、最後にこうしてあなたに伝えたいことを伝えに来たってのが本当。ま、それだけ力があればこの先も特に問題は無い・・・はず！」

・・・それじゃ、さよなら！」

そういった瞬間、目の前から消えた

・・・うん、最後まで勝手だったけど、いなくなったらなったで寂しいな。

すっかり静かになった小屋でひとりたたずむ

さて、死神はいなくなっただけど、俺はここにいるんだ。これからどうするか考えなきゃな！

第4話（後書き）

あれ、おかしいな・・・探検回のはずが・・・。

探検回がくるのが伸びそうな予感（おい！

・・・それと、主人公の名前が決まらないZE てか、主人公の名
前出すタイミング完全に逃した

第5話（前書き）

森（山）を抜けるとそこは・・・

第5話

とりあえず、外に出てみることにした。

昨日は余裕がなくてよく見れなかったが、しっかり見ると、元いた世界の植物とあまり変わらないように見える

「お、これどんぐりか？」

どんぐりがおちているということは、ここは元いた世界と自然はあまり変わらないってことかね

ほかにも見知ったものがないかどうか、森の奥へ入っていく

蛾みたいなのも飛んでるし、これはかなり自然系に近い世界っぽい

気がする

あくまで、気がするだけだが

さらに、しばらく進むと、薄暗い森が徐々に開けてきた

「森を抜けられるか？」

始めてみるこの森の外にわくわくしながら歩みを進める

「なんだこれ・・・」

しかし、予想だになかった光景が、目に入ってきた。

森の外に見えたもの・・・それは、いくつも連なった高層ビル群であった

「おいおい、あんさん、森の外の人間の町には近づくなんていうた
だろ？」

いきなり、後ろから声をかけられドキツとしたが・・・蒼健だった

「いや、別にそういうわけじゃなかったんだけどな・・・。この
町って昔からこんな建物が建ってるのか？」

まさか、未来の地球とか……

「いんや……ほんの最近までは、木で作った小さな家に住んでたんだ。それが、急に木じゃない何かで家を見て始めたかと思ったら、それがどでかくなって今みたいな感じに……。」

「ほんの最近！？っていったい何年前くらいなんだ？」

妖怪の最近の定義なんぞわからん

「10年位かね」

10年……いくらなんでも早すぎるだろうに……そこまで、文
明って進化するものなんだろうか

「それに、昔は僕ら妖怪に太刀打ちする手段もあまりなかったはず

なんだわ。それが急に、変な光線みたいなの飛ばしてきてここの妖怪がかなりやられた。だから、近づくなよ、と忠告したんだ」

こわい・・・が、少し興味もある。この世界の見聞を少しでも広めたいんだがな

「な、無駄な命を散らすことはなかろうよ。それよりもあんさん・・・。」

急に手をつかまれたと思ったらすごい速さで森の中へと引っ張られた。

「ちょ、いきなりなにを！」

「昨日は、あんさんもいろいろと戸惑っておったからな、我慢して

たんだが……。僕と勝負してくれ！」

「いやいや、なんでこの山の主と戦わなきゃいけないんだよ……。」

「あんさんのその力……見てたらうずうずするんだわ。鬼ってのはそういうもんだー、覚えておけ」

見事までの笑顔でサムズアップ キランと擬音が聞こえた気がした

「俺にそんな力はないって……」

無駄に戦いたくない！今まで喧嘩なんてろくにしたこともないし、いくら死神から強い力をもらったって、便利な能力を持ってたって……以外にいけるのか？も？

「謙遜しなさんな。大丈夫殺しはしないさ・・・せっかくこれから楽しくなりそうなんだ。」

え・・・なにそれ、この勝負の後もまた戦いたいみたいなこと言ってるの・・・

「さて、勝負をする前に・・・あんさんの名前、聞いとらんかった。」

「俺の名前か・・・」

もう、勝負するの決定か・・・くそっ、もう、こうなったら破れかぶれだ！

「俺の名前は、しげおかたいが滋丘大河だ！生まれたての妖怪だからってなめるなよ！」

こうして、人生初戦闘が始まった

第5話（後書き）

戦闘シーンって書くのかなり難しいですね！ 果たしてうまくかけるかどうかとても心配で胃が痛い！

そして、ようやく主人公の名前が紹介できましたー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860o/>

東方操粒子

2010年10月25日20時28分発行